

# バウムテストにおける根の描画と エゴグラムの一研究

鈴木 真 吾

## A study on relationships between drawing of roots in Baumtest and Tokyo University Egogram

SUZUKI Shingo

### 抄 録

バウムテストにおける根の描画とエゴグラム（TEGⅡ）との関連について検討した。144名の大学生を対象に調査を行った。TEGⅡで、5つの自我状態の尺度（CP、NP、A、FC、AC）から TEG パターンを抽出した。検討の結果、根の描画と不適応的な TEG パターンに関連があることが示唆された。バウムテストで根を描く場合、葛藤を抱えている状態にあることが推察された。

キーワード：バウムテスト

根の描画

東大式エゴグラム

葛藤

## 問題と目的

バウムテストで根は、無意識や本能、根付きといった象徴的意味を表す指標とされている。これはバウムテストの諸派でおおむね共通した理論的見解である（佐藤，2011）。バウムテストの代表的な臨床家である Koch（1957）も、根の描画は、根源の性質、原始性、本能、無意識、重さ、支えを求めるといった象徴的意味を表す指標だと解説している。そのため、根の描画を精神的に健康的だと解釈することは、一般的にあまりないように思われる。つまり、根の描画は精神病理に対して敏感な指標であり（佐藤，2011）、概して、根の描画は深い葛藤やある種の重さを感じさせると、理解することが多いだろう。このような指標の解釈と比例するように、一般的にバウムテストで根が描かれることは少なく、地面の中にある根という存在は、普通は意識されない（高橋・高橋，1986）と指摘されている。

しかし一方、近年の調査では児童でおよそ40%（依田，2007）、中学生では70%程度（鈴木・佐藤，2011）が、根の描画を含む根元の処理が不安定な状態にあったと、報告している。根は精神病理的な指標であり葛藤や重さを表すのであれば、根を描くものは少ないはずである。多くの者が根を描くならば、根の描画は不健康で精神病理的な指標といえるのだろうかという疑問が生じる。根の描画がもつ指標の意味について基礎的研究による追試的検討が必要である。

精神病理的で葛藤や重さの存在を表すという根の描画について、その指標の意味が抽象的であるためか、基礎的研究はほとんど行われていない。その中でも佐藤（2011）は、根の描画の各指標と自我機能、攻撃性との関連を検証している。その結果は根の描画が精神的な病理と関連して自我機能の低さ、攻撃性の高さを表すことを示唆したものであった。ただしそこでも、根の描画と葛藤や重さとの関連は検討されておらず、今後の課題であると指摘されている。

そこで本研究では、バウムテストにおける根の描画は精神病理的な指標といえるのかという点について、基礎的研究による追試的検討を行うことを目的とする。特に、根の描画の有無と葛藤や重さとの関連を検討することにより、根の描画の精神病理性、心理学的意味について、再確認を試みる。

なお、葛藤や重さの測定にはエゴグラムを用いる。エゴグラムとは交流分析理論に基づいた心理検査法であり、Critical Parent（CP、批判的な親）、Nurturing Parent（NP、養育的な親）、Adult（A、成人）、Free Child（FC、自由な子ども）、Adapted Child（AC、順応した子ども、「イイ子」）という、5つの自我状態のバランスを理解することができる（末松，2006）。エゴグラムでは、これら5つの自我状態のバランスから、精神的に葛藤をため込みやすく、適応的に望ましい、望ましくないといった人格パターンについて一定の解釈が可能となっている。したがって本研究では、エゴグラムの人格パターンを測定することで葛藤や重さについて検討することとした。

## 方 法

1. 対象者：大学生144名（男子76名、女子68名）を対象とした。
2. 質問紙：エゴグラム的一种である、東京大学医学部心療内科 TEG 研究会（2006）の新版 TEG II を用いた。妥当性尺度（L 尺度）が基準値以上の者（3 点以上の高得点者）を含め、全般的に回答に不備のあった者は除いた。公式の解説手引きにしたがい、5 つの尺度（CP/NP/A/FC/AC）の得点を算出し、それらの高低に応じた 5 段階にコード化した。そして人格特性を示す TEG パターンに分類した。
3. バウムテスト：「木を描いてください」と教示し、大学講義内で集団法により行った。筆者が用意した A 4 用紙に B 4 鉛筆を使用させた。本研究の目的に沿い、根の描画が有るか無いかの点だけを、筆者が評定した。なお上記の質問紙（TEG II）も同時期内で実施した。

## 結果と考察

1. 根の描画の有無：バウムテストの根の有無について評定したところ、根有りが63名、根無しが81名であった。根有りは43.7%となり、小学生（依田，2007）や中学生（鈴木・佐藤，2011）に続き、大学生でも根を描く者は決して少なくないことが確認された。

2. TEG パターンの分類：東京大学医学部心療内科 TEG 研究会（2006）による代表的な分類例にしたがった。代表的な29例に「判別不能」を含めた30分類である。

分類は、優位型 5 分類（CP 優位型、NP 優位型、A 優位型、FC 優位型、AC 優位型）、低位型 5 分類（CP 低位型、NP 低位型、A 低位型、FC 低位型、AC 低位型）、また混合型は、台形型 3 分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、U 型 3 分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、N 型 3 分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、逆 N 型 3 分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、M 型と W 型の各 1 分類、平坦型 3 分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、そして P 優位型と C 優位型の各 1 分類、計 29 分類である。

今回の調査では、分類の結果、29 分類のうち 22 分類が確認された。これに「判別不能」を加えた 23 分類で以後の分析を行った。

3. 根の描画の有無と TEG パターンとの関連：根の有無（2 群）ごとに TEG パターンの頻度をまとめた（Table 1）。

その結果、まず、根有り群だけで出現するパターンが 6 パターン確認された。一方、根無し群だけで出現するパターンは 4 パターン確認された。以下にそれぞれの TEG パターンの人格特性を示す。なお類型に付記したカッコ内の表現は、東京大学医学部心療内科 TEG 研究会（2006）による公式の解説手引きを引用したものである。

根有り群のみに確認された 6 パターンの人格特性を示すと、NP 優位型（世話焼きで面倒見がよい、過保護に注意）、台形型Ⅱ（「導師」、自己犠牲、奉仕精神、他人を助けることで喜びを得る）、U 型Ⅰ（責任感、周囲への気遣い、自他否定で葛藤をためこむ望ましくないパターン）、逆 N 型Ⅰ（責任感、論理的、「がんこな警官」、人への思いや

Table 1 根の描画の有無ごとの TEG パターンの頻度

	根あり	根なし	合計		根あり	根なし	合計
CP 優位型	8 12.7%	6 7.4%	14 9.7%	U 型 I	2 3.2%	0 0.0%	2 1.4%
NP 優位型	5 7.9%	0 0.0%	5 3.5%	N 型 I	0 0.0%	1 1.2%	1 0.7%
A 優位型	4 6.3%	11 13.6%	15 10.4%	N 型 III	3 4.8%	4 4.9%	7 4.9%
FC 優位型	2 3.2%	3 3.7%	5 3.5%	逆 N 型 I	1 1.6%	0 0.0%	1 0.7%
AC 優位型	19 30.2%	32 39.5%	51 35.4%	逆 N 型 II	1 1.6%	0 0.0%	1 0.7%
CP 低位型	1 1.6%	2 2.5%	3 2.1%	M 型	0 0.0%	1 1.2%	1 0.7%
NP 低位型	1 1.6%	3 3.7%	4 2.8%	W 型	1 1.6%	1 1.2%	2 1.4%
A 低位型	1 1.6%	1 1.2%	2 1.4%	平坦型 I	1 1.6%	0 0.0%	1 0.7%
FC 低位型	4 6.3%	3 3.7%	7 4.9%	平坦型 II	0 0.0%	3 3.7%	3 2.1%
AC 低位型	1 1.6%	1 1.2%	2 1.4%	C 優位型	1 1.6%	3 3.7%	4 2.8%
台形型 II	2 3.2%	0 0.0%	2 1.4%	判別不能	5 7.9%	3 3.7%	8 5.6%
台形型 III	0 0.0%	3 3.7%	3 2.1%	全体	63 100.0%	81 100.0%	144 100.0%

※各出現頻度のうち、上段は出現数、下段は出現割合を示す。

りが不足)、逆 N 型 II (人に厳しく自分に甘い、自分勝手、「ドンファン」)、平坦型 I (あらゆる面で心的エネルギーが高い、意欲的、「スーパーマン」、過労に注意) となっている。

一方、根無し群だけに確認された 4 パターンの人格特性は、台形型 III (自分が楽しむためにあらゆる計画を立てる、自己中心的に見える)、N 型 I (人に優しく世話焼き、No と言えない、「優しいサリー」)、M 型 (世話焼きで陽気、好感を持たれる、社会のルールを無視しないよう注意)、平坦型 II (平均的、中庸、やや個性に欠ける) であった。

これら根有り 6 パターンと根無し 4 パターンを比較すると、根が描かれている場合の TEG パターンの方が、根の描かれない場合よりも、自我状態同士のバランス関係が悪く、相克状態に陥りやすいと推察される。根有り群にのみ確認された TEG パターンの

人格特性には、CPとAC（U型I）、CPとA（逆N型I）が高いので自分に厳しすぎる場合や、CPとFC（逆N型II）が高いという矛盾を抱えている場合、また自己犠牲的になりやすいNPの高さが目立つ場合（NP優位型、台形型II）などとなっていて、いずれも自我状態の相克から葛藤に陥りやすいものと思われる。逆に根無し群にのみ確認されたTEGパターン的人格特性は、AとFC（台形型III）、NPとAC（N型I）、NPとFC（M型）の高さを特徴とする場合が多く、自我状態のバランスがよいために葛藤をあまり抱えないで済むのではないかと思われる。

だが、厳密に言えば、根が描かれていると葛藤をためやすく適応的に望ましくないと、必ずしもいえない結果であると考えられる。根有り群のみに適応的に望ましくないとされるU型Iが見られたが、根有り群の他のTEGパターンがみな適応的に望ましくないと明確に指摘されている型ではなかった。また、根無し群だけに見られた4パターンに、適応的に望ましくない型は含まれていなかったが、逆にこれら根無し群のみの4パターンがみな適応的に明らかに望ましいと指摘される型でもなかった。さらに、葛藤をためこみ適応的に望ましくないとされる他の型、A低位型、FC低位型、W型のいずれもが、根有り群と根無し群の両方に出現していた。

そこで次に、根有り・根無し両群に同程度の頻度で出現するパターンから、頻度の多いCP優位型、A優位型、AC優位型の3パターンについて、根有り・根無し両群ごとにTEGIIの5尺度の得点を検討した。

A優位型ではいずれの尺度にも有意差は認められなかった（Table 2）。AC優位型では、NPとAについて根の有り・無しで有意な群間差が認められ（NP： $t_{(49)}=2.06$ 、 $p<.05$ 、A： $t_{(49)}=2.27$ 、 $p<.05$ ）、根有り群はNPが高めでAが低く、根無し群はAが高めでNPは低いという結果が示された（Table 3）。同じAC優位型でもAがより低い根有り群の方が、やや葛藤を持ちやすいと想定される。またCP優位型では、FCについて根の有り・無しで群間差があることが有意傾向で確認され（ $t_{(7.52)}=1.89$ 、 $p$

Table 2 根の有無ごとのA優位型におけるTEG尺度の特徴

		CP	NP	A	FC	AC
根あり (N=4)	平均	13.00	16.00	18.00	11.75	15.25
	SD	2.44	4.24	2.30	5.56	2.75
根なし (N=11)	平均	11.36	11.36	17.27	9.27	11.45
	SD	3.88	5.31	2.10	4.26	3.90

Table 3 根の有無ごとのAC優位型におけるTEG尺度の特徴

		CP	NP	A	FC	AC
根あり (N=19)	平均	8.00	13.11	8.89	10.00	18.11
	SD	2.73	2.79	3.54	4.03	1.73
根なし (N=32)	平均	8.84	10.97	11.50	9.28	17.94
	SD	3.00	3.96	4.18	4.26	2.27

Table 4 根の有無ごとのCP優位型におけるTEG尺度の特徴

		CP	NP	A	FC	AC
根あり (N=8)	平均	17.75	14.38	15.38	12.25	9.50
	SD	2.05	3.38	2.20	6.23	4.44
根なし (N=6)	平均	18.50	15.50	13.83	16.50	10.50
	SD	1.05	2.26	3.13	1.05	3.27

＜.10）、根有り群ではCP以外の4尺度の値に突出した高さはなく、根無し群ではCPに加えてFCも高めとの結果が示唆された（Table 4）。ここでも、同じCP優位型の中でも根有り群の方がFCの高さを伴わないため自分に自由な感覚が少なく、根無し群に比してやや不適応的になりやすい可能性が示唆される。

以上より、本研究で目的とした根の描画の有無と葛藤との関連については、根が描かれていると葛藤を持ちやすいことを表してより精神病理的な意味をもつ可能性は示唆された。しかし、今回の調査結果からは明確な検討結果を得ることはできなかったといえるだろう。

4. まとめ：現代では根を描くものは少数派ではないことが分かった。また根の描画は深刻とまではいなくても葛藤に陥りやすい精神病理的な人格との関連が推測されるだろう。根の描画には従来から環境（人間関係）への不安感・不安定感の強さが表れるともいわれる。Koch（1957）は根の象徴的意味に支えの脆さとともに支えを求めるという意味も込めて記述している。先行研究の小中学生（依田，2007，鈴木・佐藤，2011）と今回の調査における大学生で、根が昔より多く描かれるという一致した結果は、現代の子どもや若者が不安定な人間関係により多くさらされ、また同時に誰か（人に）支えられたいという、矛盾しやすいが併存し得る葛藤を持ちやすくなっていることを示唆するのかもしれない。本研究は統計的な分析で実証が得られたとは言い難く、今後も、根を含めたバウムテストの各部位、そして指標に関して基礎的研究が重ねられていくことが望まれる。

## 付 記

本研究は日本描画テスト・描画療法学会第19回大会で発表した報告に加筆修正したものである。

## 引用文献

- Koch, K. (1957). *Der Baumtest : der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel* 3. Auflage Bern : Huns Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）（2010）. バウムテスト 第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房
- 佐藤秀行（2011）. 樹木画法における根の解釈仮説の検討—自我機能と攻撃性との関連 臨床描画研究, 26,

182-196.

- 末松弘行 (2006). TEG (東大式エゴグラム) 氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子 (編) 心理査定実践ハンドブック 創元社, 427-438.
- 鈴木真吾・佐藤秀行 (2011). 中学生における自尊心の質と適応に関する一研究—質問紙法と樹木画テストとの比較検討から— 臨床描画研究, **26**, 148-165.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト 文教書院
- 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 (編) (2006). 新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン 金子書房
- 依田茂久 (2007). 樹木画テストにおける近年の児童の発達状況の変化について—発達指標の経年的比較・検討— 臨床描画研究, **22**, 187-210.

## Abstract

The study investigated the relationships between the drawing of roots in Baumtest and scores on the Tokyo University Egogram (TEG II) in 144 college students. TEG patterns were extracted through the measurement of 5 ego states (CP : Critical Parent, NP : Nurturing Parent, A : Adult, FC : Free Child, and AC : Adapted Child). The results suggest that maladaptive TEG patterns may be related to the drawing of roots. Such drawing could indicate the presence of conflict.

Keywords : Baumtest

drawing of roots

Tokyo University Egogram

conflict